

「和」の文化を世界に

Ramona Taranu (ラモーナ ツァラス)

生け花の教室にいて、私がいつも座る場所はベランダに出る所だ。障子を開けて、見上げると、隣のマンションビルの向こうに果てしなく広がる青空が見える。信じられないほど綺麗に澄んだあの青がとても好きだ。

空からやっと目が離れると、今日の花材を見る。桔梗や撫子にススキ。その日の花をよく見て、花の特徴に合わせて美しく生けてみる——この思いからお稽古が始まる。題は自由花なので、まずは自分で生けてみる。終わると、出来上がった作品を先生が見に来てくださるのを待つ。その反応は今日もいつもの通りだ。下手な生け方なのに、最初は何も言わずに直してくださるのだ。それから必ず説明が来る。せっかくススキがあるので、風を感じさせるような生け方がいいかな、と先生が仰る。

風を感じさせるような生け方……

私の呆然とした目を見て、先生はやさしく説明を続ける。日本の美というのは、そこにないものを連想させ、感じさせるのだ。一陣の風も吹かない室内にも、風の気持ちよさを感じさせる生け花、または茶道の方では、暑い中来客への心配りとして水をまいて、涼しさと呼び起こすことや、茶道具で流れ水の音が聞えるのを演出すること、または茶室の空間では茶道具の落ち着いた色合いで自然の美を思い出させること。そこに無いものを連想させれば、見る側が喜んで、面白いと思ってくれるのだ。

先生のお言葉を聞くと、心が温まる。見る側の存在を意識して、思いやること。力を尽くして喜ばせたい、感動させたいという気持ち。生け花も、茶道も、思いやりから生まれた美の表現ではないだろうか？相手への思いやりが日本文化の底を流れる、人間と人間の触れ合いに潤いを与える川のようなものだと、ふと思えてくる。

周りの人が喜ぶため、私にもそこに無いものを連想させるような作品を生けることができるのは、いつになるだろう？それができたら、日常がどれほど豊かになるのか、想像するだけで嬉しくなる。そんな思いをしながら、生け花を身につけることに夢中になる。

鑑賞する者への配慮から生まれる美的意識といえば、世阿弥のことを思い出す。大学3年の頃、初めて能楽の大成者である世阿弥の芸論『風姿花伝』を手にした時も同じような呆

然とした気持ちだった。世阿弥が能の面白さを花に譬え、季節によって花が変わるように能役者もその場、その時分に相応しい演目をするべきだとういう。

「そもそも、花といふに、万木千草において、四季折節に咲くものなれば、その時を得てめづらしきゆゑに、もてあそぶなり。申樂も、人の心にめづらしきと知る所、すなはち面白き心なり。花と、面白きと、めづらしきと、これ三つは同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散るゆゑによりて、咲く頃あればめづらしきなり。能も、住する所なきを、まづ花と知るべし。住せずして、余の風体に移ればめづらしきなり。」
（『花伝第七 別紙口伝』）

観客を最高の演技で驚かせたい、面白がらせたいという気持ちは創造する側の使命であると同時に、最大の喜びである。みんなの反応を見計らって、見る側の心をつかむのに力を尽くす。

観客に強い印象を与える素晴らしい芸能の秘密は、やはり観客と演者の間に生じる関係にあるようだ。役者はそこまで見る側の期待を予測しようと、それに答えようとするのを、世阿弥の能芸論ではじめて知った。6百年前から伝えられてきた世阿弥の言葉に刺激を受け、演劇研究者になろうと決めて、その言葉が持っている意味を探るため日本へ留学に来た。それで、今までの研究活動で確認できたのは、観客の存在を視野に入れて芸能について論じたのは、やはり世阿弥が最初だった。これほど洗練された舞台芸術論は世界ではじめての例なのだ。ヨーロッパの方では、古代ギリシャ悲劇のあり方を伝えるアリストテレスの『詩学』があるのだが、著者は哲学者であり、役者ではなかったし、2千年前のギリシャ演劇も存在が絶えてしまい、実際にどのような演劇だったかは検討の余地が今でも残る。著者自身が舞台役者で、自分の経験に基づいて芸術について論じていること、そしてその芸能自体が何百年を経て現在までに伝わっていることは、奇跡と呼べるぐらい珍しいことだ。

その上に、室町時代の役者の情熱や芸術的思想は今の日本にだけでなく、全世界に伝わり、あらゆる芸術の創造者の思想に影響を及ぼしたというのも、非常に大きい意味を持っているのではないか？

日本の伝統芸能に魅せられて、こちらへ留学に来たのは去年の4月。現時点ではまだ1年半なのだが、この期間に気付いたのは、日本人の多くは日本はどれほど素晴らしい文化を持っているか、外の人がどれほどそれに憧れているのか知らない、ということだ。世界の民族はそれぞれ自分の特徴を強調し、世界という舞台の上で一番前に立とうとしているの

に、日本人だけは日本人らしく謙虚に振舞っている。みんなが騒がしい中、日本人だけは静かなのだ。面白いことに、その沈黙は何よりも魅力的で、目立つのだ。外の人が自分たちの競争に満ちた日常から目を引く余裕さえあれば、日本のことがすぐに好きになる。

世界という舞台では、日本はその日本人らしさゆえに大事な役割を果たしているのだ。日本文化にしかできない役割はどのようなものなのかを明らかにするために、自分がこちらで経験したことから幾つかの例をあげさせていただきたい。

大学や生け花と茶道という習い事の教室では、授業やお稽古自体だけではなく、周りの人とのつながりが大事で、そのつながりの中で自分が成長していくのを自覚できる。この環境の中で生活しながら気付いたのは、日本人のコミュニケーションの特徴の一つとしては、相手がいい人だということを前提としている、ということだ。

私が今日常的にお世話になっている方々は、日本に着いたばかりの頃私のことを何も知らなかった。それでも、親切に話しかけてくれたり、一緒に同じテーブルでご飯を食べさせてくれたりしたのだ。友達になってくれた人達も、私の誤った日本語を気にせず、心を開いてくれた。それぞれの道が違って、離れていても、あまりにたくさんの気持ちを共有しているので、つながっているような感じがする。大学の同僚の挨拶が「こんにちは」ではなく、「お疲れ様です」になった時、仲間に入れてくれたと分かった。それが何より嬉しかった。言うまでもなく、この表現は他言語で訳せない。説明はできるが、説明したら、挨拶ではなく、解説になるのだ。ある団体の一部分になったという気持ちを感じさせる言葉なのだ。外から来た人間にとってはこれ以上の喜びはない。このような人に囲まれて、私ははじめて「恩」という言葉の意味が分かった。そして「恩返しをしたい」という気持ちをはじめて痛感したのだ。

人間はみんな根本的にいいと信じることは、思われているほど普通ではない。誰しも、違う文化の枠に育った人に対して色々な偏見を抱いたりする。世界のどこでも偏見があるのだが、日本人は外国人に対しての偏見を信じる前に、その人とまず話してみるのだ。

この例を通して明瞭したいのは、長く伝えられてきた素晴らしい芸術や芸能だけではなく、日本は素晴らしい人間性を誇るということだ。日本の文化を生み出すのは日本人の心なのだ。お能や歌舞伎の魅力、和歌の穏やかさ、お茶の奥ゆかしさ、生け花の気品がみんな、相手を喜ばせたいという、思いやりの気持ちから生まれてきたに違いない。この伝統芸術がみんな同じ優美な思想で繋がっているかのように見えるのも偶然ではない。

特に人間と人間の触れ合いについて、世界が日本に習うべきことが多いと思う。まずは、

相手の事情を考えた上で行動をとる、すなわち思いやりのこと。それから、謙虚さや奥ゆかしさ、純粋なものの大事さについて、これらは全部「和」という言葉の意味に含まれているのではないか？人の心を「和ませる」ものを大事にする。何よりも「平和」を希望する——これはあまりに大事なもので、平和が続くように誰よりも先に頭を下げる日本人の態度は、みんなが未来のために必ず見習わないといけないと思う。戦争や恐怖や疑念のせいでひどく歪んだこの世界の中、みんなが進むべき方向を見失った時代に、人間の良さを信じて、「和」の文化によってこの世界の風景を「和らげる」、「調和させる」——それが日本文化の大事な、掛け替えのない役割だと思う。

日本を見て、そして世界を見ると、日本語だけではなく、日本文化をトランスレートできるようにになりたいと思えてくる。生け花、茶道や能楽のことを勉強しているのは、そのためなのだ。日本以外に住んでいる人に教えたいのは、日本人のコミュニケーションの根本にあるものなのだ。すなわち、相手への思いやり、人間性の良さを信じること。

目標に向かって一歩ずつ進みたい。まずは日本にいられる間少しずつ日本の文化を身につけて、自分の性格をこの文化の価値観で磨きたいと思う。この過程で自分がどんな人間になるのか、自分も楽しみにしている。